



凡

羅物所何

東武

二



ふふの汁の巻

歌仙行

芭蕉公羽



古池や畦とむこむみお音	暎臺
まこや其角々山吹ハ尺数	蓼太
象居して雲能夜流りく子	菅奴
廿日亥中の片町乃月	雪凍
かく秋と一二能魅や走下	完来
夏深とのむ妹おえ川巻	

瓦心能やつれなすひしを捉く
 黙我
 苜蓿粉持系乃客さうふ
 耳谷
 かゝ外に流能澹衣干あさし
 其牛
 扱毛硫黄の燄ふ山りけ
 以文
 業平乃いりき終あてやな
 三駱
 子親中川志を愈積し
 沙羅
 さゝ浪よ知とふる中さき執盤
 古音
 高藤人此れを田いけり
 揚江

よし世なれ吸物掬い塩さう
 一兆
 還清いりめく花乃入お
 嵐亭
 棄あふて歳めれ月を巻眼鏡
 普成
 捨し〜んこにこやあまれ具
 彭壽
 ひと〜み出合か〜らに〜ん
 菊太
 き〜とと昼志廊さひ〜
 月村
 蝕〜つれあま切火乃銅た〜
 月毛里
 ま〜葉尼乃尼り〜く〜
 東舎

海に寄る六浦の浮木かきとせて
雷たれしぬ秋を乃山
暮武士の長生佳る孫庇
酒^飲あくとありかへ秋ととも
新風を及掃あぬたひと
待廊ひくく柳切石
月讀乃文雀なとわひも
一さしは、気扇おせん

班象
雨静
方壺
あや足
兒鳥
龜治
在武
旧国
祇風

秋能風戸させ其園を押し
爐既子濟と能松葉かき
沢産能記念かしの仮名法
便をうく利根乃川舟
しらめく心むの三十ヶ國
いさ友よせん蝶も乙多と

子興
汀雨
百鏡
分之
不響
一路

右

雪中庵連

かばをるまき

芭蕉翁

かすくを活て出らん初松魚	あゆみ味よまけは乃夏	貝吹ける牧野の卒子此競来て	大巻お下やたつ横なり	殊もこや木くしの風月ゆれ	きらくくんなく糸糸揚のゆ
曉臺	鳥明	泉之	百明	千鯉	

逢はんよ母能作よ夢りけり
祈願おれ乃もやせんや
酒癖をかくさうとてのがこまり
もの志けりなれを走り舟
恋うとき鳴神あはる係る
舌ぬ田よ五位の奔走りり
願訓し風呂おいらき江湖僧
まうちうふる志う浪う自

雨和 江丸 素風 勉之 春圃 鳥明 泉之 江丸

燃しき火縄は流す為くき
網ほしこれ浦乃有かの
山うつろ花い川こそひう
あつき男の雛乃菓子乞
妻毎に清くおもひおんお定
杖棗あうぬ七野社
かきふん奉りきれる思て
麦の穂風のえいす津やう奈

千鯉 雨和 勉之 百明 素風 春圃 江丸 雨和

佐殿も手傳れしるかしき飯	目釘を削る雨のつれく	いそらハクふもお市は誘はん	えせ何おこれ腰乃筋りり	重儀ふ大くもとりまふくはり	鉄砲五さす詠のひんらん	まてくおさをまてハ月五更	後ろ庵りし急よ乳を
百明	烏明	千鯉	勉之	泉之	江花	素風	勉之

鏡初をものいふるも娘ハれて	むくい方一とこける相口	さむしろ子通扱の板の間接借	十八日もよき日和そや	旅立を送はせおも花ん	ま里このしる、梅も菜以
千鯉	泉之	素風	百明	雨和	春團

右
 松島庵連
 土佐庵

瀬うしほの妻

芭蕉翁

名月や川へはし来る潮か	ら			
額 <small>かぶ</small> りくみ鴨 <small>か</small> みあり	あり			
これすき落馬 <small>おちま</small> は人 <small>ひと</small> を <small>おそ</small> く	おそ			
肩 <small>かた</small> に羽織 <small>はねおり</small> を <small>か</small> き	まよ			
手 <small>て</small> のみ <small>み</small> は <small>は</small> を <small>を</small> て	も			
極 <small>ごく</small> 少 <small>すく</small> ち <small>ち</small> う <small>う</small> く	論語 <small>ろんご</small> は			
	ま			
	鯉 <small>こい</small> 十 <small>じゅう</small>			
	翠 <small>すい</small> 如 <small>じゆ</small>			
	汀 <small>てい</small> 亀 <small>かめ</small>			
	二 <small>に</small> 溟 <small>めい</small>			
	曉 <small>あけ</small> 臺 <small>たい</small>			

酒の吐息くくろの松を吹く
支離になきくく三人の白
薫み本のめき憎き髪をひま
一字くくくくくくくく
はれてり雨の袂袂を帯ゆるに
冬至の興乃梅かき帯を
船よせる岸又猿の空を
雪ふくく法法のひくくく

巻 如 亀 十 溟 龜 如 巻

公遠を連て侍従みくち思ひ
髪髪おとろきくくくく
花の上曉月乃一くくみ
層立ささくくくく
吸付ふ煙髪子蝶の羽を休め
庭のさくくくくく
院よりも賀を結結つりくく
かきくくくくくく

溟 十 如 龜 十 溟 龜 十 溟

行ありて盤渉調乃如まじり
葉と貫く則ちもくろく
世こそりて阿ほるといふと安けあは
はくみりぬて鷄卵ふあはく
蓬生子細尾付一隠一妻
大よりほれく死へくと泣く
いふ能くそ言れ月のお出やま
名刺の僧乃想子頃せ

如 十 溟 如 龜 産 十 溟

四戸の亭き子鎖く葎のかは
脊伸をまねんゆまる古杯
ふも来ぬ筏の雪より合ひ
物暫時子乾くま風
いまやぬるをを合てあけり
そあわけ入酸中の吟

如 龜 産 十 溟 如 筆

右

二溟亭無り

——
く
遠
海
き
ん

芭蕉翁

さ ふ ら う り ん も や ー よ れ 初 一 六	芝 生 か く 色 干 冬 乃 海 草	お 麻 の 角 お ー つ 歌 詠 と ひ て	廿 日 も ま ー 月 の 傾 ふ	晝 み 秋 手 も 通 さ ぬ ち と 麻	砂 利 も ち を ー て 乃 造 せ ん
	曉 臺	白 雄	祇 室	梅 夫	鳥 白

日孰山いとうつな孰風あゝ季
 被かのう子 漢るきゝ髪
 うち流るる車のかへさ火とほそ
 門柙 拈そ 二度乃きふ心
 戯れ子居士をおぬひ古羯鼓
 氣^腫種るかと 兒ハむ川うも
 帆志ふしも日しおまの四国船
 占定むをう 意黄 昏
 梅谷 洗耳 拍樹 夫 谷 老 夫 樹

志ぬおく洗へふきぬの袖白ふ
 おと川よあれし 岩の湯き
 甲く低く花子 妹月かふそ
 令法とききて一飯を乞ふ
 祖師の難急ちこ門徒の歎合ひ
 雲字道出れ女馬いよハ
 かとふれ所乃敷くく鳴こり
 籬のはし 里を河上り又侍
 鳥 樹 室 谷 老 夫 耳 鳥

なき人とすゝるにきふ旅のし
後み傭の鏡も里し
修まふく思ひきりせんまじり
扱のあゝ両文てしきりに
浦寂しけけ波をきけ 毎
寺をめぐりて袖を貫ひたり
細工場よ一寐入して昼の月
葉虫とす海あ萩の下風

耳 夫 壺 樹 室 谷 鳥 耳

鳴合て聖物なきぬくつれ橋
ありなき跡を屠都の貧民
か出さるは女もつれ世法多
三日詠く不二を見えぬ
影陰や赤み赤の蝶を打
あめぬるを筆子汲時

又 老 樹 室 谷 白

右

多麻子那大谷連

鳴海

梅亭
天府

かき思や汗も志月里に鳴海
かき

篁寺

かきさや福らき秋忠旅日和

畠中の佐屋まりり
翁の句おもひあさ

淋—さい水鶴もかくや秋の雨

四時之吟

不騫

池水志うときは—めや
こかれ梅

忠より情復をもぬける茅輪弘

所の煉を負てかくなりお撲取

—く歌や友ありりへ歌

小田の鶴

○

雪中菴連

黄香や名田能中能文所 普成

明やまき扱乃益なり郭公

初丁や落るこなるた松一木

友衝ててふを海と扱なり

眸子血成そきなり雪々鷹

香を追へハ後のさき連河梅の門 黙我
念念佛目の見らん人いきき 旧因

警蹄 さき おのや襟のあはれをかき
 くれなゐの葉裏をたどり 帰花
 おもふ事 眼よりおとれ 揺れ
 まほろし 新簪 光る 蛇籠うさ
 綴る川と 小舟 よしも 月乃前
 多啼て 遷都の跡乃 新葉に
 かさくさ 花々 へ 何の花よ鳥
 をとこ たり 冥女 たり 松り 故
 音も ちくり り ぬ 蔓や 古曆
 分

沙羅 三駱 月守 あや足 方壺 一兆 班象 子興

秋をいむ 扱くそ 海らめ 蟹の表
 かさくさ 新離を 寄し 雲の風
 葵うらみ とうり たり や 暮 夕
 末枯や 人をとく 川本の 八つ 征
 素新芽を 占ふ 里や 暮の 雨
 こそ 我忘や 世を をかき きて 硯
 明かぬ 枕より ますぬ 夕日
 一寸の 産も 心 あり 梅乃 子
 玉味 嚼め 今朝 煉と さま 白糸

汀雨 百鏡 揚江 東舎 彭壽 菊太 祇風 雨静 古音

刺刀子久まらむり 燕子花 月村
 喜西に芙蓉の葉お似たり 亀治
 葛あ子楓恋しむ 葛うぬ 萱奴
 かさよしてあそもふ人 曉月 武蔵歌 井谷
 瀧と川破船の終の汐干ば 日 其牛
 櫓や伝連結て所ぬ浄幸門 日 以文
 新しき蓑着ておとせ 種お流 日 卓如
 舟竹の吹り出り 夏の月 竹史
 夕籙や登もくもくぬ 日ぬえ 兒鳥

うら花須みあすの光や園のひま 雪凍
 毛流こし舟もかき了 雪の海 乾字
 い川の君子柳なうて 香る子 日 亞柎
 かさよ子決あうこくさく 日 文李
 恙難や雲の蔭もともま 日 須美
 祢はん舎や雲お云ハ 半お半 風馬
 秋風花灯子くえ 見ゆ連活杖川
 藤花舞をまを山乃姿 日

碓の東に吹越るや小夜像

るららーあやあつめて飛こころ
りあもるやー秋の川あーさうり
威鳳

一寸にーてまのさく萱う那 巴夫

月をふ一扱二夜や牛の妹
扇もも拍童そめ月あささ
かーかと男の吏不田植う那

昼息み花乃宿ありんを

あかあは月よりさひー言燈籠
八粒や牛子ぬりまの色
まよりも人よいをーさうか

こかーや月吹くて旭を
百さうり門たうす花をう那
挿扱もも橋ハかなふて貸小神
子習よおてりけや雛子の舞
女歳与
丸香

○

炭賣れ小世の古及かふいりり 月巢
浪を衝沖中川や秋の魚 魚文
羽子つき—子の子なりりり中 嵐亭
友かへてあふいあふり夕梅 眞麥
海よりさへ友余りきん川千鳥 文母
るに啼るもおほく秋鼻月か 完来

あふりり砂かあふりり砂あ菜 藁多太
かきとふんひをりの元よ競りり

雪中庵

○

土籠庵連

梅う枝り雪あ啼也中か 千鯉
株日和釣を秋沖のあふりり
小松系梅ふ芽出—のえうれ 勉之
初春や板家子雨の秋もさへり

春のきき集啄む鳥いさるにあく 百明
下戸ハ志り—水のちり水の味

土籠庵

○

松露菴連

猿ひき子笠振白やわら萩摘 泉之

いなつらや大踏掃る市の夜 両和

咲そめて三月余うや花枝 素風

いふつまやこらゝの山月出る 江丸

本母寺のしむ佛返り春の月

明かゝ乃唇啼返はるる 素風

又月面や足子志とく古典

櫓の火ややえと一光り縁に

雪解や襟え袖も門の口 春里

松とれて湖まき乃とあつ風 雨染

かのくと折葉も日赤し 兀雨

一寸乃麦子風布くぬゆ衣 春圃

花盛満きな目をあうらり 鳥明

まゝもやものしき昼の火お籠

松露菴

新川や梅又て通ぬ 椽系 二溟
友路中こゝてあつとしまつて
江の月や這あくりとも 板の舟
日乃表や墨弦の橋子消て隈

並 松を草又えおろを雪雀は
瞽女の舞ふちひさき袖やけり花
なりきあや草掃へ教をば井筒
蛇の巢乃繁きとめても 為るまは

うきくさのこよよとまり 細ふれ ^女 汀亀

○

多摩郡大谷連

蝶虫と何出てり 留吉の籠るれ 祇室
何ふなくも遊り 麻子ころも
はつ汐や鳴乃社志あらしむき
まの目や篠系くはる一ね

松もりも振ると越ていづのふせ ^{成瀬} 溪林

山をこ那葉かたはななりて 又衣
いふつるや田の畔くく乃押りけ
よ乃多乃志ぬ知恵あり 鶺鴒

ま葉して久又めくお山石るお

成瀬

梅都

世をたてしやうり世よあり 神龜だ

青江

まの目きく多さまくしきまなり

青流

鳴ちとり月ハ山の端よかきり

梅谷

春乃風あくよすうを樹の白い

小川

雪窗

地乃雲のちようげあや天は厚

初風

人をしたるかれとくまを啼

五英

啼るし瓦おくものかんことり

長津田

芦冠

葦 や梢をふあゝ多志を

七人

富結

ゆふのほやねろろハぬ片折る

可明

撞中のうにんや志の免れ去多啼

本曾

巴阜

け縁を魚もちるなり 稻乃花

忌田 桃 覺

庭中一木の蔭をそよやしの雨

垣 寺

あさかやかくへて 救たるあ

東 水

り人よささ節又ゆるき田に

桃 里

落栗や家のとまれの古井桁

万 里

ふ家や墓塚も清なる物なり

和 水

新穀やおもへん長を花 儼ひ

町田 鳥 白

傘 提てぬれり 春の小西小

大谷 梅 夫

又さうちにさむくなりぬふ松栢

花あつれ花あつれ 地のおもかしこ

流れ井や石菖の根の 卯 卯

むかつくえむさあふゆへお 拙花

曉 臺

木の紫しくくありお上の落葉は

書林

江戸室町三丁目
京寺町松原上

須原屋市兵衛
辻井吉右衛門

何存松年九十
昭和十年十一月
寫了



